

3. 勉強会・講演会の開催

(1) 開催の目的と方法

1) 開催の趣旨・目的

- ・ 『雲仙プラン100プロジェクト』では、雲仙地域並びに国立公園の再生に向けて、「みんなが考え、みんなが行動し、みんなが支え合う」プランづくりを目指している。
- ・ 本勉強会・講習会は、準備ワーキングや準備委員会メンバーをはじめ、地域の人々や事業者が積極的に参加・行動を起こし、主体的にやる気を持ってプランづくりに取り組めるよう、みんなが意識を高めあうこと、また、具体的な検討・課題解決に必要な知識を身につけることなどを目的として、開催する。

2) 開催の方法

- ・ 雲仙地域及び島原半島地域に関することをテーマに、講師を招き、関係者や地域の人々の自由参加のもとで開催した。
- ・ 開催日、講師の人選、テーマなどについては、準備ワーキング・準備委員会で検討し、決定した。
- ・ 雲仙地域で2回、島原半島全域を対象に2回開催した。

3) テーマ及び講師

雲仙地域及び島原半島地域について、それぞれ次のテーマ及び講師による勉強会・講演会を開催した。

対象地域	テーマ	講師	開催日
雲仙地域	宝さがしから始まる観光地域づくり	京都嵯峨芸術大学 教授 真板昭夫氏	2011. 2. 4 2011. 2. 5
		地産地消の取り組み（湯布院での取り組み）	ゆふいん料理研究会 代表 新江憲一氏
	島原半島地域	まちづくり・ユニバーサルデザイン	(有)ミカユニバーサルデザイン オフィス 取締役社長 長谷川美香氏
国内の温泉街の街づくり事例		榊梵まちづくり研究所 代表 吉田道郎氏	2011. 10. 25

(2) 勉強会・講習会の開催

1) 「宝さがしから始まる観光地域づくり」勉強会・講演会

平成23年2月、豊富な実践経験をもとに「宝探しから持続可能な地域づくりへ～日本型エコトリズムとはなにか～」という本を出版された、京都嵯峨芸術大学教授真板昭夫さんをお招きし、講習会・勉強会を開催した。雲仙でも取り組んできた「あるもの探し」の原点を再確認し、「宝」からプランづくり、地域活性化につなげていく道筋についてアドバイスいただくことを期待したものである。

① 開催概要



もじゃに真板昭夫氏による勉強会・講演会
2月4日(金) 2月5日(土)
 ＊14:30～17:00フィールドワーク (お山の情報館別館集合～雲仙温泉街)
 ＊10:30～12:00講演会 (お山の情報館別館)
 ＊19:00～21:00勉強会 (お山の情報館別館)

宝さがしからの資源の保全・観光振興、そして持続可能な地域づくりへ

このほど豊富な経験をもとに「日本型エコトリズムとはなにか 宝探しから持続可能な地域づくりへ」という本を出版された、京都嵯峨芸術大学教授真板昭夫さんをお招きし、講習会・勉強会を開催いたします。

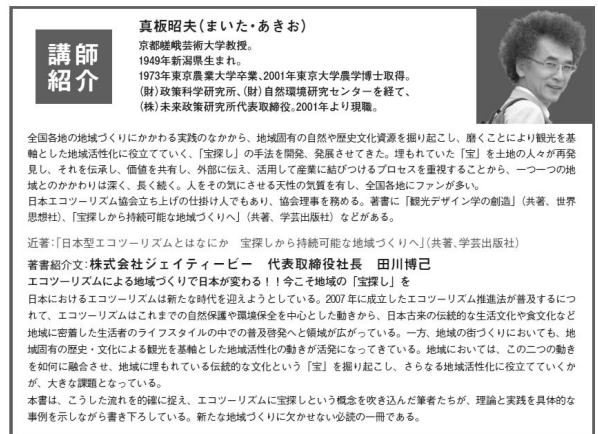
勉強会・講演会の主な内容

- 「地域づくり、エコトリズムって何?」
- 「地域づくり、まちづくりに大切なこと、必要なことは?」
- 「みつけた地域の『宝』をどうやって共有して、磨いて、地域の活性化につなげるの?」
- 「ビジョンを行動に移して実現していくために必要なもの・こと」
- 「モチベーション、組織、人材の作り方と維持の仕方」
- 「全国・世界の事例紹介」など

住民の皆さまの参加をお待ちしています!

主催 雲仙プラン100プロジェクト実行委員会
 問い合わせ TEL/FAX 0957-73-2224 (事務局 野原)

詳しい情報は裏面へ



講師紹介
真板昭夫(まいた・あきお)
 京都嵯峨芸術大学教授。
 1949年新潟県生まれ。
 1973年東京農業大学卒業、2001年東京大学農学博士取得。
 (財)政策科学研究所、(財)自然環境研究センターを経て、(株)未来政策研究所代表取締役、2001年より現職。

全国各地の地域づくりにかかわる実践のなかから、地域固有の自然や歴史文化資源を掘り起こし、磨くことにより観光を基軸とした地域活性化に役立てていく、「宝探し」の手法を開発、発展させてきた。埋もれていた「宝」を土地の人々が再発見し、それを伝承し、価値を共有し、外部に伝え、活用して産業に結びつけるプロセスを重視することから、一つ一つの地域とのかわりは深く、長く続く。人をその気にさせる天性の気質を有し、全国各地にファンが多い。日本エコトリズム協会立ち上げの担い手でもあり、協会理事を務める。著書に「観光デザイン学の創造」(共著、世界思想社)、「宝探しから持続可能な地域づくりへ」(共著、学芸出版社)などがある。

近著:「日本型エコトリズムとはなにか 宝探しから持続可能な地域づくりへ」(共著、学芸出版社)

著書紹介文:株式会社ジェイティービー 代表取締役社長 田川博己
 エコトリズムによる地域づくりで日本が変わる!!今こそ地域の「宝探し」を日本におけるエコトリズムは新たな時代を迎えようとしている。2007年に成立したエコトリズム推進法が普及するにつれて、エコトリズムはこれまでの自然保護や環境保全を中心とした動きから、日本古来の伝統的な生活文化や食文化など地域に密着した生活者のライフスタイルの中の普及啓発へと領域が広がっている。一方、地域の街づくりにおいても、地域固有の歴史・文化による観光を基軸とした地域活性化の動きが活発になってきている。地域においては、この二つの動きを如何に融合させ、地域に埋もれている伝統的な文化という「宝」を掘り起こし、さらなる地域活性化に役立てていくかが、大きな課題となっている。

本書は、こうした流れを的確に捉え、エコトリズムに宝探しという概念を吹き込んだ筆者たちが、理論と実践を具体的な事例を示しながら書き下ろしている。新たな地域づくりに欠かせない必読の一冊である。

スケジュール

2/4(金)	★フィールドワーク (お山の情報館別館集合～雲仙温泉街) 無料 あるもの探しの成果・各組の一押しプランを携えて、雲仙プラン100ワーキングメンバーの案内で真板氏と共に雲仙温泉街周辺を巡ります。その後真板氏とプランのブラッシュアップや、雲仙温泉街について意見交換します。
14:30～17:00	
19:00～21:00	★勉強会 (お山の情報館別館) 無料 「あるもの探し」の原点を再確認し、地域に埋もれている「宝」から、如何に観光活性化、地域活性化へつなげていくか?その手法やプランづくりについてお話しいただきます。言葉から行動へ、その実践者から学びましょう!
21:00～23:00	★懇親会 (小松レストラン) 会費2,000～3,000円くらい ※軽食程度
2/5(土)	★講演会「宝さがしから始まる観光地域づくり」(お山の情報館別館) 無料 地域の自然や歴史といった「宝」を土地の人々が再発見し、それが産業や地域づくりに結びついてゆくプロセスについて、わかりやすくお話しいただきます。日本・世界を舞台に、宝探しから観光を基軸とした地域活性化を実践してきた講演者の元気が出るお話し、聞きませんか?
10:30～12:00	

問い合わせ TEL/FAX 0957-73-2224 (事務局 野原)

② 開催結果

■フィールドワーク

講師:真板昭夫氏(京都嵯峨芸術大学 教授)

日時:2011年2月4日(金) 14:30～18:00

場所:雲仙お山の情報館別館発着(詳細はタイムスケジュール参照)

雲仙プラン100プロジェクトでは、平成22年11月に小地獄班、札の原班、12月に絹笠山班、別所班、仁田峠班で「あるもの探し」を行った。その後、そこで発掘した地域の資源やその周辺の環境などを勘察し、雲仙プラン100プロジェクトのワーキングメンバーが「こんな活用ができればいいなあ!」「こんなことができれば、もっと、この資源を活かせるぞ」と、雲仙の魅力づくりとして実践していきたい<一押しプラン>を準備してきた。

当勉強会のフィールドワークでは、その一押しプランを中心に、「あるもの探し」で見つけた資源の紹介をしながら、講師である真板昭夫氏とともに各ポイントをまわり、検証を行うこととした。

タイムスケジュール

2/4(金) 14:30	お山の情報館別館 * 開会 * 真板昭夫氏あいさつ * 参加者自己紹介(1人1分) * これから回るコースの概要説明 市来勇人
15:00 ↓	* 出発 * 東洋館マイクロバスと加藤自然保護官の車に分乗
15:20 ↓	ロープウェイ(仁田峠班) * あるもの探しの成果、一押しプランの紹介① 石田直正
16:15 ↓	小地獄(小地獄班) * あるもの探しの成果、一押しプランの紹介② 石田真隆
16:35 ↓	教会(札の原班) * あるもの探しの成果、一押しプランの紹介③ 荒木美智子
17:00 ↓	白雲の池(絹笠山班) * あるもの探しの成果、一押しプランの紹介④ 森佑一郎
17:25 ↓	旧八万地獄(別所班) * あるもの探しの成果、一押しプランの紹介⑤ 加藤隆太
17:45 ↓	お山の情報館別館 * 真板昭夫氏による全体講評
18:00	* 閉会 * 終了



仁田峠展望台 (仁田峠班)



雲仙教会 (札の原班)



白雲の池 (絹笠山班)



旧八万地獄 (別所班)

■勉強会・講演会の開催

講 師：真板昭夫氏（京都嵯峨芸術大学 教授）

日 時：2011年2月4日（金）19：00～21：00、2月5日（土）10：30～12：00

場 所：雲仙お山の情報館別館

勉強会・講演会は、以下に抜粋したパワーポイント資料を使用して行われた。

観光とは

国の光を探し誇ることにある (易経より)

「観光」とは、「国の光を観る」こと。
「光」とはその地に住む人々が
「最も自慢するもの」であり、
「他者に誇れるもの」。
 「お客様は神様です」の「みせもの興業」から、
 本当の意味での
「観・光・客」へと変身すべき時代。
 自慢すべき「光」の多いところほど発展
 は持続化し、結果として「観光客」は増加
 していく。

エコツーリズムの構造

日本エコツーリズム協会、1998
真板・海津(1994)に基づく

第一部 地域自慢「宝探し」

宝探しのフレーム

自然 【生存基盤】 共に生きる仲間 人間が住むはるか以前からのような生き物が住み、環境を守り上げてきたのか。	生活環境 【知恵】 いきるための知恵 人は自然とどのような付き合い、関係として生きてきたのか。	歴史・文化 【交流】 先人の足跡を辿る 先人ほどどのように人・物・文化の交流を感じ、知恵を蓄えてきたのか。	産業 【発信】 外部世界への発信 産業の技術の蓄積、移り変わり、軌く、集まっている産業はどのようなものがあるのか。産業はどのようなことで発展してきたのか。	名人 【継承】 地域の知恵袋 先人の知恵や技を受け継ぎと伝承。	要望 【エネルギー】 未来へのエネルギー 潜在的エネルギー(豊潤)の体現化、望ましい未来社会の形成。
自然	生活環境	歴史・文化	産業	名人	要望

資源調査活動の組み立て

宝探しの事例

不思議発見、誇り発見！



「宝さがし」の意義

- 日常的な資源の価値の再発見と価値付け
- 自慢できる物は何か」を利害を超え地域住民間で共有しあおうとする作業であること
- 地域個性化の切り札として生かせること

「宝」認識と「資源」認識の違い

1. 「宝」は主観的な価値であり、「資源」は目的に対する手段である
「宝」が主観のうちにあるのに対して、資源は目的合理性によって評価される
2. 「宝」は人の顔がみえる
「宝」には、それを価値として認めている人や集団、共同体の「思い」が込められている。
3. 「宝」の間に優劣はない
「宝」はそこに価値を認める人の存在によって「宝」となる。
4. 「宝」は地域の生活文化の体系を構成する
「宝」の総体は生活文化の体系を構成するといえる。生産・生活には時間（季節）があり、場所がある。したがって生活文化の体系の表現として季節暦とマップは「宝さがし」にとって必須の表現である。
5. 「宝」は地域の持続可能性の証言者
「宝」は、今日、その地域が存続していることの根拠を提出するものである。

第二部

宝の活用

「宝探しから宝興しへの展開」

「宝さがし」から「地域づくり」への展開

段階	内容	
探	宝を探す	地域固有の自然、歴史、文化、産業、人などの資源を地域住民自身が発掘・再発見する
磨	宝を磨く	発掘・再発見された宝を保存・伝承・発展させるための活動
誇	宝を誇る	宝の価値を認識し、地域の中で価値認識を共有するための活動
伝	宝を伝える	地域の外に向かって、宝を発信するための活動
興	宝を活かす	宝を活用して産業に結びつけるための活動

宝おこし地域ブランドの形成3要素

- 1、理念や地域の宝に裏打ちされた、なぜこの地域なのか、このデザイン、商品なのかの理由付けや理念の確立
- 2、宝おこしの商品の地域固有性という正当性（道具や、材料、から語られる地域商品であることの主張）（道具立てともいう）
- 3、その商品を生み出していることを象徴する環境と場の設定

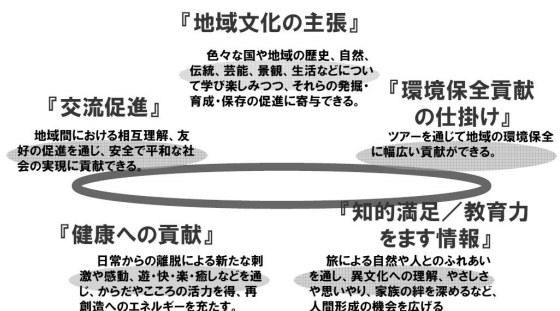
第三部

実践へのステップ 地域自律型プログラム作り

- 何を伝えるべきか
- どう伝えるか
- 顧客満足度は達成されているか？
- どんな仕組みで推進するか

エコツーリズムプログラムの要素

JTB 田川博己氏講演資料に加筆

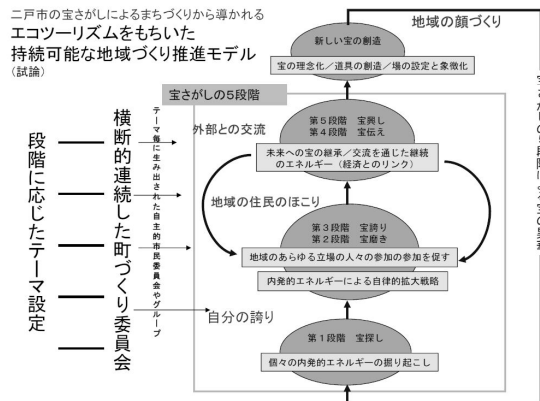


プログラムの組み立て

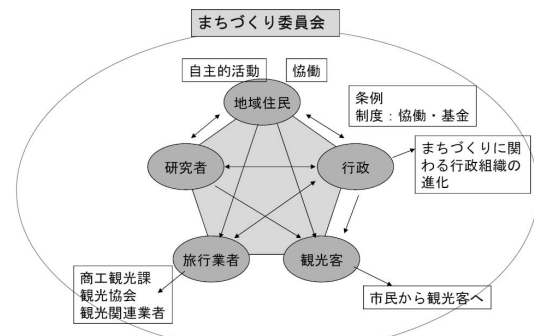
- 資源の特性
 - 季節・時間帯
 - 場所
 - 移動方法
 - ものがたり（由来、かかわり、利用法等） 等
- 参加者の特性
 - 条件（年齢・経験・体力・健康状態等）
 - 志向
 - 使用言語 等

第四部 持続的な推進体制や運営組織等の構築

二戸市の宝さがしによるまちづくりから導かれる
エコツーリズムをもちいた
持続可能な地域づくり推進モデル
(試論)



5角形からみた理想的な組織論の到達点



組織は活動の成熟におけるれん分け
宝探し段階に応じた目標とテーマの設定
最低の活動の為の資金担保
活動成果の明確化
中心拠点の環境整備(場の設定)

のれん分け

市民グループ

- ・伊加古雑穀の会（平成6年）
- ・花いっぱい会の会（平成6年）
- ・そば打ち愛好会「二戸御法度の会」（平成6年）
- ・「湯の香市」（平成9年）
- ・にのへ桜の会（平成11年）
- ・Waの会（まちづくり委員会OBの会 平成15年）
- ・二戸オンドリの会（平成15年）
- ・九戸城を活かしたまちづくり協議会（まちづくり賞受賞）
- ・きばって足沢70の会
- ・馬淵川の姫童を楽しむ会
- ・えのみ会の会（まちづくり賞受賞）
- ・杉の木会（まちづくり賞受賞）
- ・榎木平山里会（宝の周辺整備事業）
- ・雑穀料理研究・普及グループ「食い道楽」（食育コンクール優秀賞）

個々の活動の公共化、一般化

- 1) 誉める仕掛け
表彰制度等
- 2) 広げる仕掛け
ミニコミ紙等
- 3) 競争を促す仕掛け
コンペと資金援助等
- 4) 活動を支える為の枠組みの設定
計画
環境整備 等

終わりに一言 エコツーリズムによる持続的な 地域づくりがめざすもの

住民が地域の資源の価値を認識し、
ものの所有者から
地域の価値の所有者にもなること

郷土意識の育成と参加への促進



真板氏講演の様子

「宝さがし」は、個々に新しいツアープログラムづくりのために行うというよりは、みんなで資源探しに歩くことによって、雲仙に住む自分たち自身が他に誇れるものを見つけ出し、共通認識として確認することがまず大事だということが理解された。

これをきっかけに「雲仙とは何か」を改めて考え直すきっかけになった。それを観光まちづくりの出発点とすること、言い換えると、宝さがしを戦略的にまちづくりに生かしていくことの意義を学ぶことができた。

2) 食の勉強会～湯布院での食の取り組み～

雲仙地域は食材の宝庫である島原半島に位置し、特に、雲仙温泉は、その利用拠点として、宿泊施設や飲食店が軒を連ねる。その立地を活かし、地域を元気にするため、宿泊施設の調理師の方々や飲食店にも意識を持って取り組んでもらうため、小俣郁雄専門委員の紹介で、地産地消の先進地である湯布院温泉より、その取り組みの中心であるゆふいん料理研究会会長の新江氏を招聘し、食の勉強会を開催した。

午前中は、ゆふいん料理研究会の取り組みや現在の旅行者に提供すべき食やサービスについてお話しいただき、午後は、各ホテルの調理スタッフや飲食店店主を対象に、豆腐料理についての勉強会も行われた。

① 開催概要

講 師：新江憲一氏（ゆふいん料理研究会会長、湯布院温泉草庵秋桜総料理長）

日 時：2011年6月27日（月）11：00～12：00

場 所：お山の情報館別館会議室

聴 講：22名



② 開催結果

- ・ 草庵秋桜という13部屋の25から30名くらいの旅館の料理長をしている。
- ・ 湯布院に住んで23年。そのうち5年間はイタリアに住んでいた。
- ・ 湯布院に調理師会がなかったため、料理人で集まりませんかと声掛けをして「ゆふいん料理研究会」を発足させた。
- ・ 湯布院では3泊4泊が当たり前、同じ料理をださないように配慮している。メニューがFAXで流れてくるが、メニューだけではわからないので、料理研究会で何をだしていますかというのをお互いの共有もする。
- ・ 最初は修業先で身に付けた料理をだしていたが、中谷健太郎氏（湯布院温泉で旅館亀の井別荘を経営する実業家。2009年第1回観光庁長官表彰。）に「新江くんの料理は、お客様にも、命にも、つながっていない」といわれ、命につながるってなんだろうと考えた。
- ・ また、中谷健太郎氏に料理って何かとたずねた時、「食べ物です」といわれた。つまり「料理」とは、食材を食べやすくしたものなのだろうと思った。そこからさらに、その食べ物は誰のために、なんのためにと考え深めていったが、ここからは料理人の枠で通用するものではなく、お客さんへのホスピタリティという枠にはいったものだった。
- ・ 今の時代は、料理を「全力」でつくっても、お客さんは「全力」を求めている。昔と違い、お腹がすいていない時代。100%お腹がすいていないお客さんに100%の料理を出すと残飯もでてしまう。ぼくは今、6割で作るようにしている。

- ・ 何週間も何カ月も前から予約して、半日かけて遠くから来たお客さんはお腹いっぱいになりたくてきているわけではない。「その町」や「料理」にふれることで、極端に言えば、生きていてよかったと思いたくて来ている。
- ・ 時代がこれだけ変わっているのだから、自分の習った料理をそのまま提供するのではなく、変えなくてはいけないものがある。変えないと次の時代にうけとってもらえないということもある。
- ・ またある時、中谷健太郎氏に旅館の商品は何かとたずねた。すると中谷氏は「人と人が出会う仕組みが原点にあって、お客はそれ以外は望んでいないし、旅館もそれ以外のことはできないんじゃないか」と答えた。
- ・ それをぼくは、「環境」と「空間」ということと理解した。この「環境」は、お客さんのためのものでなく、従業員のための環境のことを言っていて、休憩がとれない、給料があがらない、愚痴とぼやきばかりのような労働状況は改善すべきと思っている。
- ・ 事実、若い子たちが働く環境が壊れている。
- ・ 55歳以上の料理人の仕事はなく、道路工事の警備員をしている方を多く知っている。その後は60歳から年金をもらう65歳まで仕事がない状況。
- ・ 今の主流は、30代の料理長、50代の料理人が必要ないかと言うと必要なだけけれど、その理由を明確にしなければいけない。
- ・ 経営者だけに文句をいっているわけではなく、料理人が違うかたちを見出さなくてはならないと思っている。
- ・ 言ってしまえば、料理はまずくなければ良い。「まずくない料理に最高のサービス」が一番だと思っている。
- ・ お客さんは何時間かけて、何をしに来るのだろうと考えることが大切。腹いっぱい食べさせてくださいというお客さんはほとんどいない。
- ・ 昭和は価値の時代、平成は意味の時代。例えば、1,200円の弁当にはエビが入る、確かにエビに価値はあるが、湯布院でエビには意味がない。
- ・ お腹をいっぱいにするのではなく、心の満足度が問題。来たお客様を満足させたい。料理をつくりながら、感動とおどろきをあたえつづけていきたい。感動しなければ最初から料理をつくらなくてよいと考えている。
- ・ 中谷健太郎氏に料理を出したとき、料理については何も言わなかったが、見送りで外に行ったときに言われたことがある。「新江ちゃんここは湯布院だね」そのとき、「ああ、料理で湯布院を全て表現するわけではないんだ」と思った。
- ・ 食べ終わったあと、それが湯布院であれば湯布院。
- ・ 総合力で成り立つとしたら、浴衣を着て、表を歩くときに雲仙であればよい、雲仙でなければいけない。
- ・ 湯布院で死にたいくらい湯布院が好き、だから次に残していきたい。
- ・ 100年後でも湯布院が存在して、湯布院の料理人も存在して、「100年前にこの人たちがいたから今料理人ができる」と思ってもらえたら嬉しい。
- ・ 雲仙は旅館の数が15、6軒と聞いた。湯布院が160軒あること考えると、やりやすい場所だと思う。今日からでも明日からでもできることからやり始めたらよいと思う。

この勉強会を受けて、飲食店組合が、既に行っていた、雲仙の豆腐や島原そうめんなど地元食材を使ったオリジナルメニューの開発・提供にも弾みがついたほか、ホテルや旅館においても、地元食材を使ったメニュー開発の動きが生まれ始めることとなった。

③ 開催結果

■ユニバーサルデザイン（UD）を考える

○ 国内外の事例紹介

- ・ 苗場の例だが、若者が集まってロックフェスティバル（フジロック）をやる会場までの道は、ぬかるんでいて、毎年長靴で来て下さいと言われるところだった。これを何とか改善して、色々な人が来れるようにしようということで、板一枚を1,000円で買ってそれで道を作るというNPOが新潟で動いている。これもUDの一つといえる。
 - ・ 上海万博に行ってきたが、中国も少子高齢化が進んでいて、点字誘導ブロックや、最近では多機能トイレなども普通に行われるようになってきている。中国は遅れているというイメージがあったが、ほぼ日本と同じようになっている。中国の人たちも清潔に使うとか、車いすの人に関してもかなり浸透しているし、儒教の国なのでお年寄りを大切にすることをきちんとやっていくという部分では同じようなことがあると思う。
 - ・ 交通機関のサインがどうも色々なことが書かれすぎていて分かりづらい。足元にサインが書かれていることがあり、それはそれで大事だが、上に物を置いてしまうと見えなくなってしまうという弱点がある。また、情報量が多過ぎると読みとれない。いかに情報を減らし、ぱっと判断がつくようにするのもUDの一つであり、色々なサインを見て勉強するのは温泉地としても有効だと思う。
 - ・ パッケージやリモコンもUD化が進んでいる。パッケージの色については、切取りのところに黄色い帯で書いてあるものが、即席みそ汁とかふりかけとかに出てきているのでかなり良くなったはず。一番変わったのはテレビのリモコンの数字のフォント。文字そのものがユニバーサルデザインになったりしている。
- 雲仙にふさわしいUDを
- ・ 地獄を歩いていて、歩きにくいところを石にしてしまっているところをボードウォークにするというのもいいかもしれないが、硫黄でガタガタになってしまうということもあるので、この土地でどういう風に歩きやすくして、来てくれた人をどうハッピーにできるかということを是非考えていってもらえるといい。
- UDとまちづくり～不便を分かり合うことで助け合うという関係を作る～
- ・ 視覚障害の人が困ることで自分にとっても同じように困ることを探す、聴覚障害の人が困ることで自分にとっても困ることを探す、など少しずつ道に出ていくことがとても大事。お互いに少しずつ不便を分かり合うことで助け合うという関係ができるというのがとても大事だ。
 - ・ 町づくりは助け合うことがないとできない。町づくりは住民だけで頑張れば良いということではなくて、色々な人たちの力を少しずつ借りて、自分のところを良くするという力を働かせないと、うまくいかない。
 - ・ 今の雲仙は少し動脈硬化で詰まりがちになっているのかもしれない。サラサラにする薬を外部に求めるのか、中からきれいにしていくのか、ということも検討してみると良い。



■ まちづくり学校での試み

○ 新潟の「まちづくり学校」設立の経緯と理念

- ・ 私が代表をしているNPO法人まちづくり学校というところは、もともと新潟県内で一匹狼的にまちづくりをやっていた人たちが組織になって動いたらどうなるのかという実験的な形で始まった。その経験をふまえて、やっぱりまちづくりの人材を育成することが大事ということでNPOを作った。今年で10年を迎えた。
- ・ まちづくり学校には3つの校則がある。1つは、やりたい人がやる。良いなと思った人がやる、やぶへび精神。2つ目にお互いに助け合う。得意不得意がはっきりしているので、やれるところまでやってお互いの能力を出しあっていく。恩着せがましくない根性よし精神。3つ目がみんなが生徒、みんなが先生。お互いに学び合う姿勢を忘れないようにしましょう。めだかの学校精神でやっていきましょうということ。この3つの精神に共鳴してくれた人達が学校に入ってくれている。現在87名位の会員がいる。
- ・ 2000年にまちづくりの人材育成のNPOを立ち上げますという記者会見をした。理念は、色々な人を掘り起こし、その人を育成して、みんなの思いを実現し合う場を作ろうというもの。
- ・ 公がつくる領域もあるが、私がやりたくてやることもある。それがだんだんと公になることもあるので、結果的に統合されていく。まちづくりの基本的なところは、ハッピーな気持ちになること。そういった社会システムを作っていこうというのが理念で、まちづくりの人材育成を中心として、公共事業の参加の場づくりのコーディネートと運営や震災の復興などを行っている。



○ 人材育成の講座

- ・ 代表的な事業として、新潟県の事業で「まちづくりコーディネーター養成講座」を新潟NPO協会と共に「新潟県NPO地域づくり支援センター」という団体を作ってやっている。1泊2日が2回の半日が1回という長い講座だが、話し合いの場のあり方、場の作り方、ファシリテーターに必要なスキル、プログラムの組み立て方などを養成講座でやっている。
- ・ それとは別に、新潟市の「まちづくり講座」というものもあり、去年度は実際にまちづくり活動をしている人が講師になって、自分の考えていることや活動を報告するというのをやった。例えば、真島さんという方は、新潟県内のおいしいものを集めたセレクトショップをやっているが、特に熟れて農家が捨ててしまいそうなものを買って売るといった形で、農家の作ったものをみんなが幸せに食べられるように運ぶということをやっている。現在は、ワンデイシェフの店も運営している。彼は今、新潟市のまちなかが回っているので、まちなか再生に向けて市民有志から一口10万円出してもらって、それを活用して事業を行い、得られたものをまちに還元していくという話をしている。
- ・ それと、新潟駅の周辺整備ということで、新幹線と同じ高さに在来線を上げようという事業がある。勝手に駅を作るな、市民の意見も聞いて設計に反映すべきだということでワークシ

ョップをかなりしました。 駅の連絡通路の上でわざわざワークショップをして、話し合いを深めたりした。

- ・ また、「みなとまち新潟観光ボランティアガイド養成講座」というのがあるが、これは新潟市からガイドを養成して欲しいという委託を受けたもので、どういう講座にするか、どう運営するかというのを私達も企画を出して受けた。観光ボランティアに対しては、従来型のボランティアのガイドのように、延々としゃべる、自分の知識をどんどん伝えるというのではなくて、いかに心地よく楽しく歩けて、必要な情報だけを的確に伝えていけるかということで、すごくコンパクトな語りで後をひくような、そんなガイドを養成していて、3期目を迎えている。
- 集まる場、語る場をセット
 - ・ 楽しいことで、まちづくり交流会議や養成講座の受講生みんなで集まることもしている。ここで重要なことは、集まる場、語る場が余りないと、みんなの情報が的確に伝わってこないということがある。皆さんもプラン100で定期的に集まって話をして情報が共有されてきていると思うが、そういったことがいかに大事かということがある。
 - ・ まちづくり学校が行政の味方をするわけでもなく、住民の味方をするわけでもなく、その間を取り持って中立な立場から良いまちを作るという作業をしていく中で、各地で共通にぶつかる問題や情報交換をすることで、より豊かな新潟県になるだろうということで行っている。かなりいろいろなトピックが出てきて、まちなか再生や笑いで町を再生できないかとか、新しい試みの話を交換したりしながら集まって語らっている。
 - ・ まちづくり学校では出版物として「マチダス」というものを出している。まちづくりの人たちが持っている良いスキルを凝縮した本。それと、3年前に亡くなったまちづくり学校の初代校長の小疇弘一。新潟市の良心と言われるくらい、経済界からも行政からもコンサルからも信頼を得ており、こういった良い先輩がいたから、後ろがついてこれたのかもしれない。上手にコーディネートをするのではなくて、みんなの気持ちを高めるような、背中から手をかざすだけのようなやり方で、みんながその気になる、そんなような人でした。
 - ・ 部活動なんかもやっている。最近は「居酒屋研究会」が盛り上がっていて、渋い居酒屋のおいしいものを食べに行ったりする。

■ 中間支援組織の役割

- まちづくりのため、行政の支援もするし、市民の支援もする
 - ・ こんな形で、ワークショップや色々なことをしながら楽しい学びをしつつ、行政と市民の間に立ったり、町の中に入って行って町の人々の気持ちを聞いて地域づくりを考えていたりとかをしている。企業の方々にも私達のスキル、会議を楽しくやるコツや短い間に成果を出す会議の方法を作るといこともやっているの、いろいろな人たちとつながり合いながら町を考えていくということをしている。同じ業界の中で固まるということもあるが、かなり異業種と集まっていることが多くある。
 - ・ 中間支援という耳慣れない言葉だが、両方共の支援を行うという感じがしている。行政の支援（不得意なことを補完する）もするし、市民の支援もする。両者の良いところ、やりたい気持ちややりたいことを引き出し、結びつけ、橋渡しをすることもある。
- 得意技、気持ちをつないで実行に移す、そのためのノウハウを提供
 - ・ 学校のメンバーのプロフィールを見ると、ほとんど仕事がバラバラ。農業が強い人がいたり、UDが強い人がいたり、建築やデザイナーがいたりする。実際の活動場面では、同じノウハウを持って臨む。例えば、まちの人たちが強い思いがあって会議に来てても、仲良くなれな

ったり、力を発揮できないという時に、私どもが話し合いの場を通じてつなげて引き出していく、あふれ出るように支援を行うことが必要になる。町はいろいろな人が得意技を持ってやっている。その得意技をつなげて、あの人のニーズとこの人のニーズを合わせると良くなるという情報を持っている人が、一番大事で動ける人になる。しかし、その人がどう動いて、どうコネクションを作って、どうみんなの気持ちを結びつけて実行に移せるか、実行に移す時にどんなプログラムを作ればそれが効果的に動くのかということが分からない場合が多い。まちづくり学校では、長年ノウハウを積み重ねて、そのような課題に対応する様々なことをみなさんに提供していくということをやっている。

- やりたい人の気持ちをしっかり受け止め、共感の輪を広げていく
 - ・ やりたい人がやる、お互いに助け合うという、やりたい人を押し出す周りの人の力や、やりたい人の気持ちをしっかり受け止めて見守る人がいれば、アイデアを具現化することを誰がやるんだ？という話にはならない。仲間をコーディネートして役割を振り分けられるコーディネーターも必要。また、何かをやりたい人が、とにかくちょっとやってみるから手伝ってくれ、というように動いていかないと、全部止まってしまいがち。そういった軽いノリで動ける環境も大事。まちを良くしようというのは、その気持ちを持ち続けられるようにみんなが環境を作っていくかというのが大きい。会議を繰り返すやることも大事だが、小さい成功体験のようなものを積み上げることも大事で、イイねっという共感の輪を広げつつ、やりたい人がやらないと動かなくなってしまうかねない。
- お互いにいろいろな人を知って、いろいろな人に助けを求めてつながる関係が重要
 - ・ そして、自分たちだけでは、活動が難しい時に、外部にいないか、知り合いにいないかと探すのも良い。いろいろな人を知っている人からの紹介やいろいろな人に助けを求めてつながることが、大切になる。顔が見える関係を作り、お互いの弱さや困っていることを話し合える関係を作る。水平に結ばれている関係がないと難しい。
 - ・ 商いをしている同士はうまくいかないことがあるが、まずは、まちを思うことができようまくいく。互いに尊重し合える関係が成り立っているのであれば、一人で、または自分たちで抱えすぎないようにすることが大事。
 - ・ 私はあまり得意なことはないが、全体を見渡すことと、できない人を持ち上げることはできる。今年からは下支えの方に回って、若い人を回していこうと考えている。こんな活動が、長崎の方にもあるんじゃないかなと思う。県内になければ近いところで探しながら、いろいろなノウハウを学んでもらって、次のステップにつなげていってもらいたい。

【質疑応答・意見交換】

質問：長谷川さんから見た雲仙はどう映りますか。

長谷川：いい人たちがいるのは分かるし、やる気もあるんだろうと思う。動き出せないという理屈がいっぱいくっついていく気がする。駄目なことを先に考えて、どうすれば良くなってどうすれば良いかということを思って動こうとする人が、実際になかなか現れてこない状態のような気がする。きっと、アイデアはいっぱいある。俺がやる、というのがない。それか、適切な人がいないということでそれを探しているのかなという感じもする。

そんなに大きな所からやらなくてもいいと思う。きっと雲仙はいきなりエベレストとかマッターホルンを目指している所があるのではないかなと思う。もっと近いところで、きちんとできることをしっかりやればいいと思う。

やれることはまだまだたくさんあって、今日の「UDまち歩き」でも分かったと思うが、ハードで直そうとするとお金も時間もかかるが、ソフトでやれば簡単にできることがたくさんある、というところからまず始めると変わる。

一人でもやり始めたら、その人を徹底的に応援すること。一生懸命やっている人を馬鹿にして欲しくないし、足も引っ張って欲しくない。良いことをやっているんだから、褒めて一緒にやれば良い。その気持ちがないと動かないと思っている。

地獄を綺麗にしようと思って毎日掃除をしている話も聞いた。みんながどれだけ地獄を愛しているかが良く分かるので、まず地獄の中で困っていることとか不便なこととかもっと良くなることとかを、どう味わって欲しいのかという強い気持ちがある何かを作ってもらっただけでも、全然変わるんじゃないかと思う。

自信を持って欲しい。こんな素敵なものをなんでもっと大事にしないのかと思っている。そこを謙虚に、でもダイナミックに動いていくべき。みなさん経営者。やれる人達なんですけど、はみ出ないようにする何かがあるのかもしれない。

雲仙が頑張ったときに、誰が共感してくれるかということも、すごく大事だと思う。誰が味方になって本当に盛り立ててくれようとするかということを見ると、小浜の人かもしれない、島原半島の人達が、この地域全体のために雲仙やってくれたねって言うてくれるのであれば、それはすてきなこと。欠けているというよりは、怖がらずに1つずつ積み上げていけば、共感の輪が染み出していく先があるんじゃないかと思う。

雲仙が25年先にどう変わるかは想像がつかないが、このままじゃいけないという気持ち、どう変わりたい、どうしたいかという、誰がやるじゃなくて俺がやる、になってくれればいいと思う。

質問：本業とまちづくりの両立が怖い。突っ込むと本業ができなくなる。町が好きで、島原半島が好きでやっているが、それをやることによって自分の生活が成り立たなくなることが怖い。そういうのはどうやって乗り越えているのか。

長谷川：一人で背負わない。役割分担をしっかりとやる。一人でできるまちづくりはない。みんなに助けってもらわないとできないので、一人で難しいことは3人でやったっていい。一人で全部動かないようにすることが大事で、常に情報を共有する。どんなに細かいことでも全員に伝える。そうすることが大事。そして、結果は後からついてくる。まちがよくなれば、商売も良くなると信じることだ。

本業も時間を取って、そのバランスを自分なりに探っていく。私もミカユニバーサルデザインオフィスというUDの会社をやりつつ、まちづくり学校をやっていく中で、とてもやりにくい所があった。やれる時間にやるという、時間を作るように会社の人にお願いをするのも大事。頭を下げて、この時間だけやらせてくれという本気度を見せる。自分の気持ちを、まずは身内からしっかり分かってもらうことがないと大変。

反対している人を説得できる自分がいれば、どんな事業でも突破できる。全員参加型でまちづくりをするように引きずり込んでいく、そういう気持ちが大事。

質問：協働でやるということは非常にプラス思考になる。参加すれば自分も商売ができるということで導いていくのは大事なことと思う。参加すれば利益につながるというのは、まちづくりの基盤になるような気がする。

長谷川：一緒にやるという時に、コーディネートする力がどうしても必要。いろいろな人をただ合わせるだけではなく、どううまく力が発揮できるようにするかということ。そういう

意味ではコンサルも入っていて、熱意のある発注者がいてやっているというのは恵まれている。今、この機を逃してはならないということで、みんなの気持ちが高まっていかなくてはいけない。

会議がたくさんあって毎日毎日大変だと聞いているが、今が一番の踏ん張り時。辛いからといって逃げず、ここを乗り切るといいことが皆さんのところに戻ってくると思う。

お金が回る仕組みにならなければ皆さんにとっては辛いわけなので、お金が回る仕組みをみんなで考えていくことが大事。自分だけが儲かればいいというのではなく、町にお金を回せる仕組みを作る。

意見：震災もあって仕事が厳しい状況。仕事もまちづくりもやっていかななくてはならないという葛藤。どちらに力配分をすればいいのかを悩んでいる。

長谷川：勇気を持ってやってもらうのが大事。本業は渡せないの、まちづくりの部分で渡し合うのを考える。

意見：プラン100でもいろいろやりたいことの中で、どういう風に優先順位を付けていくのが今からの問題だと思う。自分が自分のことを分かった上で、役割分担をできるような状態まで我々もなりたと思う。

自分の利益のためではなく、みんなに金を回していけるようなというのは、そのつもりで動いていても横から掠め取っていくような人もいる、その辺りはどういう対応をされたかを伺いたい。基本理念というか、反対している人をどう説得するのか。

長谷川：一人勝ちするような人は、地域で商売をしていけなくなるはず。まちのことを思い、活性化していけば、おのずと自分の商いのことも考え直さざるを得ないこともでてきて、改善することもあるだろう。でも、それがさらにまちの活性化につながっていくという、そういう循環ができてくる。できれば、そういった利益の一部をまちの為に使う仕組みを作っておけば、気持ちよくみんなで動いていけるのではないかな。

意見：仕事と両立できるのか心配だというのは私も思っており、当然出てくることだと思う。それで、長谷川さんがおっしゃった一人で抱え込んではいけない、小さいことでも協力して進めていく、そういう関係を築いていくことが雲仙を良くしていくためには必要なことだと本当に思う。

意見：やれる所からとか、自分の良いところを確実にして次につなげていくということを大切に、次のステップに進んで行きたいと思う。

まちづくりにおけるユニバーサルデザインの基本は、ハードの対応で済ませるのではなく、例えそれが不十分であっても、大事なものは、「おもてなしの心」、相手を思う心であり、不便を分かり合うことで色々な人たちと助け合う関係を作りだしていくことだと指摘され、温泉街再整備のプランづくりにもこの考え方を反映させていくことが確認された。

また中間支援組織としての「まちづくり学校」の話はわかりやすく、雲仙プラン100推進のための組織づくりの参考になった。そしてまちづくりへのスタンス、例えば、関わる際に自分の仕事とどう両立させるかなどについての助言は、聞き手を勇気づけ、やる気にさせるものであった。

4) 国内の温泉街の街づくり事例勉強会

雲仙温泉以外の温泉地においても、宿泊客の減少など雲仙と同様の課題を抱えている地域が多く、それらの地域がどのような温泉地づくりを進めようとしているのか、今後の雲仙温泉街の街づくりの参考とするため各地のまちづくり・地域振興・都市計画・建築設計等に携わり、杖立温泉、城崎温泉、水上温泉、草津温泉など温泉地のまちづくり・地域活性化・街なみ形成等にも多く関わる吉田氏より、国内の温泉地域の事例を紹介いただいた。

① 開催概要

講師：吉田道郎氏

(株式会社梵まちづくり研究所代表、雲仙プラン100策定委員会専門委員)

実施日：2011年10月25日(火) 20:00~21:00

場所：湯元ホテル

② 開催結果

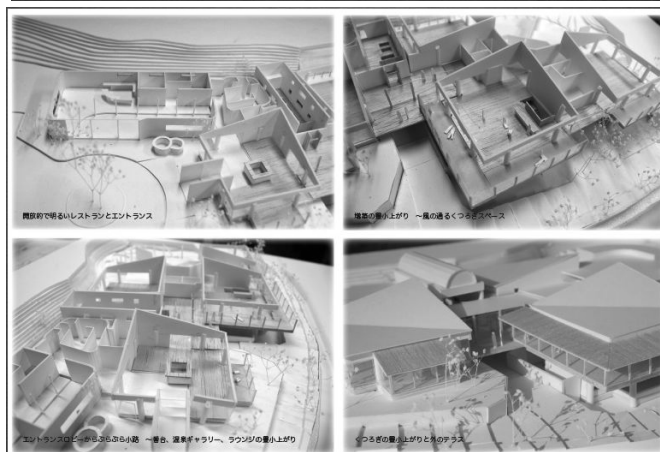
熱海温泉、草津温泉、水上温泉、城崎温泉の温泉街づくりの事例を、地域の現状や歴史的な背景を踏まえスライドで紹介。

熱海温泉からは、平成19年4月に市長直轄で設置された「観光戦略室」が行う「観光戦略会議」や感動を与える体験プログラムを地元住民とともに開発し提供する「熱海温泉玉手箱」が紹介された。

「観光戦略会議」は、市役所内部の壁、市民と市役所の壁、また官民の壁、これを取り払って、もう一度熱海の観光についてゼロから見直して考えて新しいビジョンを打ちたてようと実施されたもので、観光団体や行政、市民、外部の観光プロデューサーにより構成され、吉田氏は観光戦略プロデューサーのひとりとしてかかわった。「熱海温泉玉手箱」は、単に

観光客を呼び込むという目的のほか、地域の人が地域資源の再確認を行うという目的があり、こうした事業にかかわるなかで若いキーマンが発掘され、精力的な活動を始めた例も紹介された。

水上温泉からは、「まちづくりは人づくり」を目的に、水上温泉街の空き店舗を利活用して2005年にオープンした“まちづくり拠点「ピノキオ」”や湯原地区のまちなみ協定の事



例が紹介された。

草津温泉の事例として、湯畑周辺の再開発プロジェクト「草津湯源湯路街」と、そのなかで実施される湯治体験・観光案内施設「湯源の湯屋」と湯路広場の整備などが背景とともに紹介された。

城崎温泉からは、兵庫县城崎町（現豊岡市）が合併前に、住民参画のもとに策定した城崎温泉のまちづくり指針となる「城崎このさき 100 年計画」を紹介。この計画のコンセプトに掲げた「めぐる」を実現するリーディングプロジェクトで吉田氏が企画から携わった「木屋町小路」を紹介。街の回遊性及び施設内の回遊性と賑わいの創出を目的に、地域の若手が新規事業にチャレンジできるテナントの設置などが行われた。これらの3年間にわたり施設建設の意義、機能配置、運営方法、デザイン等の検討を進めたこと。市が建設、商工会が指定管理者となり運営していることなども紹介された。

各温泉地が雲仙と同様の課題の解決に向け、新たな時代にあわせた温泉地づくりに着手していることを知る機会となった。また、地元の資源を発掘し地元の手で売り出していくことや街づくりのための地元主体の組織の重要性なども認識された。勉強会后、吉田氏より各温泉地の組織について情報をいただきながら、雲仙プラン100地域づくり委員会の立ち上げ準備を進め、組織の発足を後押しするきっかけともなった勉強会であった。